

「リンさんからの贈り物」

徳島県 渡辺 恵子様

二〇二十年の二月二十三日のこと。今から二十五年前、私が日本語学校の講師をしていた時代の教え子のリンさんが、息子さんの大学受験のために、広島から徳島に来県した。着いたその足で、息子さんを連れてわざわざ我が家を訪ねてきてくれた。

「しえんしえい。おひしやしぶりです」

私は思わず、プツと吹き出した。リンさんは、「先生、お久しぶりです」と言っているつもりなのだ。

「しえんしえい。これ、お土産です。広島名物の、サクラだよ」

リンさんは、屈託のない笑顔を浮かべた。紙袋を開けると、その中には花ソーセージが入っていた。

「私が日本語学校に通った時、しえんしえいは私たちに、サクラのちらし寿司を作ってくれました。」

リンさんは、花ソーセージを懐かしそうに眺めながら言った。

その当時、リンさんは中国からの留学生で、他の生徒たちもみんな、経済的にキツキツの状態で頑張っていた。十人余りの生徒たちのために、私は月に一回、大きな寿司桶と一升分のお米と、シーチキンの缶詰、きゅうり、卵、そして、花ソーセージを持参して、放課後に花ちらしを作った。ご飯を炊いている間に、きゅうりをサイの目に切り、錦糸卵を作り、酢飯に具を混ぜてから、最後に花ソーセージの輪切りを飾って出来上がり。生徒たちは、みんな楽しみにしてくれた。

祖国を離れて一人暮らしをしている生徒たちに、せめて食事だけでも華やかな彩りを添えたいと、私の心ばかりの贈り物だった。

リンさんは一年で帰国したのだが、祖国で日本人と結婚し、二十年前からご主人の故郷の広島で生活していた。

その日の夕食に、リンさんから貰った花ソーセージを使って、あの「花ちらし」を再現

することにした。

寿司桶いっぱい花ソーセージを散らしたお寿司を眺めながら、リンさんは感慨深げに呟いた。

「しえんしえいのお料理は、春も夏も、秋も冬も、じえ〜んぶ、サクラ満開でしたね。それを見る度に、私の心は明るくなりました、」

リンさんは広島に来てから、息子さんのお弁当には必ず花ソーセージを入れてるらしい。いよいよ二十五日の受験の日が来た。私は朝、五時に起きて、リンさんと息子さんに、サプライズ弁当を作ることにした。卵焼きにトンカツ、出世魚のブリの照り焼き。そしてご飯の上に、焼き海苔で「V」の文字を作って貼り付けた花ソーセージを三枚飾った。

先日、リンさんからお礼の電話があった。

「しえんしえい。日本人は、心もサクラなんですね。サクラ弁当を、ありがとうございます。しました。」

息子さん、桜満開の結果となりますように。